

鈴木勇一郎・高嶋修一・松本洋幸編著

『近代都市の装置と統治 1910～30年代』

(首都圏史叢書 7)

日本経済評論社 二〇一三・二刊
A5 四〇〇頁 四八〇〇円

本書は、都市における活動を維持・改善する「都市装置」をキーワードに、近代都市史研究に切り込んだ論集である。首都東京の形成・発展の中で都市装置に絡み合う多様なアクターの利害と相互作用に着目し、いわゆる「都市インフラ」に限らず様々な論点を提起している。

第一編では市民生活と深く関わる都市装置の「公共性」に注目が向けられる。櫻井良樹「関東大震災以前における東京市内交通機関をめぐる公益性の議論」は、東京の都市化過程で交通機関がいかに論じられたかを考察する。時期により議論の範囲・焦点を推移させつつ、各主体は自らの利害を「公益」、反対意見を「私益」として対立した。吉良芳恵「横須賀市における尿尿処理問題」は、都市の衛生・財政両面に関わる尿尿処理の変遷を追う。肥料販売の局面で都市と農村の関係、都市間競争など多様な論点を包含するが、一九三〇年代以降には衛生行政による処理が求められるようになった。吉田律人「関東大震災と横浜市の警備体制」は、軍隊招致の経済面に注目した地域振興論とは異なる視角を提起する。大都市でありながら陸軍部隊が常駐しない横浜は、関東大震災の

衝撃から治安維持装置としての軍隊という観点で招致運動を活性化させるようになった。山口由等「日用品小売市場の展開」は、小経営を基礎とする都市型小売集積施設を取り上げる。小売市場は家計の合理化・健康的な食生活の宣伝など消費運動を通じた経済全体の効率化や水準上昇への取り組みという公益性の担い手でもあった。源川真希「都市の神社と選挙粛正」は、男子普選導入期に神社が公的に利用されることに注目した。神社は単なるシンボルに留まらず、規範や疑似的な共同性を創出する新たな機能を付与され、都市装置として位置づけなおされる。

第二編では都市郊外における都市装置の整備が、地域の政治・経済に及ぼした影響が考察される。石居人也『死』をめぐる都市装置」は、墓地が都市周縁に配される過程から市街地と郊外との関係を探る。墓地の郊外化・「公園墓地化」が志向される一方、墓地が置かれた地域の経済や認識が再編され、都市を周縁から支える機能を与えられた。鈴木勇一郎「池上をめぐる郊外開発と本門寺」は、近代都市の郊外化進展と神社仏閣の関係を、池上本門寺を事例に考察する。池上が田園郊外地域として定着する一方で、本門寺の存在が様々な施設を引き寄せ、空間秩序は非常に流動的であった。白石弘之「一九一〇年代東京市近郊における私設水道と賃取橋」は、東京周辺農村の急速な都市化に伴う混乱を、水道や橋梁が例外的に私設されなければならなかった事情の解明を通じて考察する。市街地化に伴う開発利益を得るため、地域有力者たちは法的・経済的な制約を自力で突破しようとした。松本洋幸『田園都市』の水道問題」は、近代水道が都市の外延的拡張

において果たす空間編成機能に注目する。都市の財政問題や将来構想などから水道問題は地域政治に大きな影響を与え、水道施設は合併に伴い大規模化・一元化が進行していく。梅田定宏「大都市装置としての『帝都天然公園』」は、東京外部の森林地帯にすぎなかつた奥多摩が、郊外行楽地という都市装置に位置づけなおされる過程を分析する。地域の行楽客誘致活動と、国立公園をめぐる議論や行政方針の変化という両面に考察が加えられる。

第三編では「都市装置」の整備を可能とする前提に分析が加えられる。神山恒雄「大都市近郊の町村財政」は、合併直前の東京市隣接五郡の町村財政について、公債をてがかりに検討する。都市周辺町村の財政難が合併を促したが、個別の資金調達の省略や利子負担軽減などが合併される側のメリットとしてあげられる。高嶋修一「市街地改造装置としての都市計画関係者集団と土地区画整理」は昭和期に存在感を増していく専門土木技術者について、内務省系の専門家養成・組織化過程や共有された理念を考察する。それは明治地方自治体制の解体・再編と並行した統治システムの模索でもあった。

以上簡単な紹介に留まったが、新たな視点・題材を豊かに提起しており、研究の進展に大きく寄与するものである。

(中西啓太)